

(様式3)

外国人児童生徒等教育アドバイザー派遣結果報告書

| 都道府県名        | 栃木県  | 市町村名 | 栃木市 | 大学名 |  |
|--------------|--|------|-----|-----|--|
| 派遣日時         | 令和7年6月26日(木曜日) 13:45~16:30<br>【栃木市日本語指導研修会】<br>1 研究授業及び授業参観 13:45~14:30<br>日本語初期指導<br>2 授業研究会 14:40~15:10<br>3 講話 15:10~15:50<br>4 情報交換等 15:50~16:30   |      |     |     |  |
| 実施方法         | 派遣 / 遠隔  |      |     |     |  |
| 派遣場所         | 栃木市立大平中央小学校  |      |     |     |  |
| アドバイザー氏名     | 市川 昭彦 先生   |      |     |     |  |
| 相談者(受講者)     | 栃木市教育委員会事務局学校教育課<br>グローバル教育推進室<br>(市内小・中学校の日本語指導担当者等)  |      |     |     |  |
| 相談内容等        | ・効果的な日本語指導について<br>・日本語指導の実践例等について<br>今年度初めて日本語指導を担当する教員が増え、指導者としての日本語指導力の向上が喫緊の課題である。  |      |     |     |  |
| 派遣者からの指導助言内容 | 「外国人児童生徒教育への理解と指導法について」<br>～JSLカリキュラムを通して～<br><br>1 外国人児童生徒を取り巻く環境について<br>・ 少子化に伴う日本人労働力の減少、外国人労働者を受け入れるための入管法の規制緩和により、外国人人口が増加している。そのため、日本語指導が必要な児童生徒も年々増加し、多言語化している現状がある。今後もその状況は続いていく。<br>・ 各地で受入れが始まった頃から、日本語を母語としない子どもたちの教育は、まず日本語指導を行い、その上で教科指導を進めようという考え方が強く、日本語指導と教科指導は切り離されていた。そのため、日常会話はできるようになっても、在籍学年の学習が理解できるようにならないということが現在も課題となっている。<br><br>2 JSLカリキュラムの授業づくりについて<br>(1) JSLカリキュラム開発とその成果物<br>・ JSLカリキュラムとは、日常会話はある程度できるが日本語の力が不十分なため、学年相当の学習言語が不足し、在籍学級での日常の学習活動に支障が生じている児童生徒に対して、学習活動に参加するための力を育成するカリキュ |      |     |     |  |

|                    |   |
|--------------------|---|
|                    | <p>ラムである。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ AU とは、学習活動の各局面を構成する活動単位 (Activity Unit) ごとに、それぞれの活動を行うために必要な日本語表現 (多用される教師の発問や指示語) を体系化したもので、様々な日本語表現を組み合わせた「AU カード」が子どもの実態に合わせた授業づくりを支援することを目的として作成されている。</li></ul> <p>(2) JSL5 支援について</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ JSL5 支援とは、日本語指導における5つの支援 (理解支援、表現支援、記憶支援、自律支援、情意支援) であり、本日の研究授業でもそれらの支援が適切に行われ、児童生徒の学習を支えていた。</li></ul> <p>例：絵や写真で示したり、簡単な言葉で言い換えたりする…理解支援<br/>やり取りで表現を引き出す…表現支援<br/>声に出して読んだり歌ったりする (音声化) …記憶支援<br/>学習習慣を身に付けるための課題…自律支援<br/>温かな声掛け、笑顔…情意支援</p> <p>(3) 今求められる日本語指導について</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 在籍学級の学習活動に参加するための力を身に付けられるような指導が求められている。</li></ul> <p>「トピック型 JSL カリキュラム」の授業では、AU カードを活用して日本語表現を本時のねらいに据えることができる。</p> <p>「教科志向型 JSL カリキュラム」の授業では、教科学習のねらいと日本語学習のねらいの2つに視点を当てて指導及び評価を行うが、教科のねらいを優先する。各教科には特有の学習の仕方があるため、教科の知識や概念を獲得するためには、各教科の典型的な学習の仕方を経験することが大切である。<li>・ 学校では日本語、家庭では母語を使っている子どもたちの語学力は尊敬に値する。日本語が分からないだけなのに、勉強ができないと自信を失うことがないように、心理面で支えながら指導していく必要がある。</li></p> |
| 相談後の方針の変化、今後の取組方針等 | <ul style="list-style-type: none"><li>・ 在籍学級の学習活動に参加するための力を育成するという視点での日本語指導について指導担当者の理解が深まった。(研修アンケートの肯定的回答100%)</li><li>・ 本市では、拠点校での日本語初期指導を終えた児童生徒は、在籍校で教科につながる学習の指導を受けるが、指導者が変わっても指導・支援に一貫性をもたせることができるよう、指導担当者や児童生徒に関わる教員間でJSLの5つの支援について共通理解を図ることが重要であると再確認できた。今後の研修等で広く周知していきたい。</li><li>・ 持続可能な指導・支援体制の構築については、今後の大きな課題である。現在の体制では、日本語指導が必要な児童生徒のニーズに応じた指導が十分にできているとは言い難い。日本語指導が必要な児童生徒の人数に応じた教員の適正な配置と併せて、指導担当者の指導力向上に向けた取組が必要であると考えます。</li></ul>   |

1枚にまとめる必要はありませんので詳細に記載願います。

なお、本報告書の内容は、文部科学省ホームページで公開いたします。